

8 嫁たちに床ずれをつくられて

任運荘のMさんは胃がんで他市の専門病院に入院。職員が見舞うと、付き添いの嫁たちは週刊誌を読む者、ベッドで足をぶらぶらさせる者——しごくのかです。

「高熱が続いて床ずれができた。本人は痛くないようだ」と告げられ、びっくり。「だったら、体をさすったり、向きを変えたりしなければ。病気のうえに床ずれまでつくられてはかわいそう」。早速、体を見せてもらおう。すごい床ずれに驚きタオルを丸めてかかとを保護するなど応急処置をします。地獄に仏、Mさんはただ涙を流すだけです。

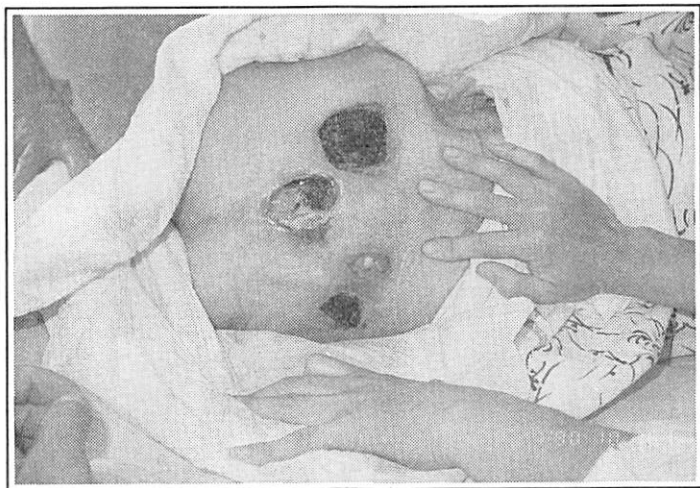
別の日、他の職員が見舞うと「先日は、なに様かしらんが偉そうなことをして。病院にまかせればいい。こっちだって家族を犠牲にして母をみている。他人からとやかく言われることはないわ。投書してやろうかと思う」「母も母、

こんなにてやっているのに、寮母さん！ 寮母さん！ と呼ぶ。任運莊に帰りよ、と言ってやった」と。

入院から一カ月後、治療不能になり退院。死を前にすれば家族が一番なのに、嫁たちが拒否。Mさんも任運莊を希望し、ひん死の姿での帰園です。直ちに清拭^{せいしよ}。あっ！ 寮母たちは思わず叫ぶ。仙骨部に直径一八センチの床ずれ。次に現れて五カ所も。痛かったろう。夢うつつに寮母さん！ と呼び続けたのは当然です。

嫁たちは家族を犠牲にしてと言うが、犠牲になっているのは母なんです。

Mさんの傷に合わせて、無圧布団に穴をあけ、床ずれ接触部位を保護、その他の圧迫部位には大小の、そばがら入りの円座を当て、砂袋も冷やして使います。傷は真皮まで達し浸出液も出ている。ヒビテン消毒、イソジン白糖貼布、リバガーゼ保護。深い傷にはイソジン白糖が著しく効果的です。（薬局で調合してもらおう。白糖二七〇ㇺ、イソジン液二七ㇺ、イソジンゲル軟膏九〇ㇺを混合。保存は一カ月、ガーゼに厚さ五ミリ程度伸ばし一日、一〜二回とりかえます）。



付き添う嫁たちの介護なのに、床ずれが――

大切なことは体の向きを変
えることです。重篤の体
には急激な体位変換は無理な
ので、圧迫部位を少しずつら
す程度で、三十分から一時間
ごとに行ないます。昼夜の別
なく。床ずれのできそうな場
所は常にさすって血行を促し
ます。以上のことを少しでも
怠ると小さなかき傷や発赤（
ほっせき＝床ずれの前ぶれ）
は、すぐ床ずれになる。発汗
が多いので、背中にバスタオ
ルを敷き、寝間着が交換しや

すいように胸の上から羽織るようにする。栄養のある食事也很重要です。高カロリー食の経口摂取と点滴の併用です。その間、よく話しかけ、温かくスキンシップを保つことを努力します。この精神的引き立ては体に著しく効果的です。

おむつカバーを使用せず、防水加工のあるシーツを敷き、その上におむつを置く。おむつはパット式にしてMさんに負担をかけないようにし、ぬれたらすぐ替えます。清拭は体の清潔だけでなく、血行促進の重要な作用があります。

医師の頻繁な診察、看護婦、寮母のつきっきりの看護、仲間たちのお見舞い——「皆が祈っているからね」。静養室には緊張の中にも温かさがそよいでいます。床ずれに表皮ができ始めます。しかし、Mさんの命は治癒を待たず力尽きます。退院後わずか二週間でした。

臨終期は家族にも付き添ってもらいます。「なるほどそんなふうにすれば床ずれができないんですね。実家の母の時に役立つわ」。この嫁には、姑は最後まで他人。もう一人は「これで私が姑をみつたことになりますわね」と夫へ催促がましい。さすが夫はむっとして返事しません。

葬儀での遺族あいさつで「肉親の献身的な介護のかいもなく……」と、強調していました。